



吹く風



詩風エッセイ集

新谷雅先



目次

まえがき	
追いかけて	3
吹く風	
01	7
02	9
03	11
04	13
05	14
06	16
07	17
08	19
09	21
10	22
11	23
12	24
あとがき	
確かに今でも君はぼくの中にいる	29
奥付	
奥付	33

まえがき

追いかけて

まっすぐに歩いてきたけど
いつもいつもぼくはつまずいているよ
起き上がる時にはいつも
いつも君のことを想っているよ

過ぎ去った数々の罪が
心奪う、そんな時にだって
いつも心のどこかでぼくは
君のことを想っているよ

追いかけて 君の想いを
追いかけて 君の言葉を
追いかけて 君の心を
追いかけて 君のすべてを

明日からの暮らしの糧に
ぼくは君のことを想っていくよ
君を想うぼくのために
いつも君をぼくは想っていくよ

つかまえて 君の想いを
つかまえて 君の言葉を
つかまえて 君の心を
つかまえて 君のすべてを

吹く風

01

ぼくの初恋はいたずら好きの風が
落としていったおかしな夢
思いもかけないことのように
君を忘れていた
（『初恋』より）

中学の時に凄く好きな人がいた。
容姿が好みだったし話も合うし
彼女を思うと心がときめいたし
きっとそれが初恋だったと思う。
そして彼女と絶対離れたくない
という理由で同じ高校を志望し
なんとかその高校に入学できた。
入学までの時間は恋の成就とか
その行く末とかを心に描いては
大いに胸を弾ませたものだった。

ところが高校の入学式の会場で
同じクラスの列にならんでいた
ある女子の姿を一目見た瞬間に
なぜかしらあんなに好きだった
彼女への思いが消えてしまった。
あれだけ大きな存在だったのに
あれだけ胸を焦がしていたのに
この人生その日その瞬間を境に
クラスの子のことばかり考えて
彼女の事は一切考えなくなった。

数日後にその好きだった彼女と
偶然帰りのバスが一緒になった。
そこでは会話もあったのだけど

恋は完全に冷めていたのだろう
心がときめくことはなく、もう
どうでもいい存在になっていた。

02

永遠へと続く絹の道の上を
幸せの黄色いリボンが舞っていた
16度目の春はそんな時やってきた
夢にまで見た君の笑顔を乗せて
(『16度目の春』より)

中学何年の頃かは忘れたが、
一人の女子がやる気のない
ぼくを元気づけようとして
懸命に背中を押してくれる、
そんな夢を見たことがある。
初めて見る顔だったけれど
昔から知っている雰囲気
懐かしい気分につつまれた。
目が覚めた後もさわやかな
気分だったのを覚えている。

高校の入学式の会場で同じ
クラスの列の中に不思議な
磁気が出ているのを感じた。
引かれるまま顔を向けると
何とそこに夢の女子がいた。
その途端にぼくは一変した。
それまで恋心を抱いていた
中学時代の同級生のことを
瞬時に忘れてしまったのだ。

一目惚れというのではない。
彼女が好きだという感情が
心の中を駆けたのではなく、
「ぼくは彼女を追いかける

彼女はぼくの背中を押す」
そういう展開になるという
予感が心の中を巡ったのだ。
その予感は当たっていた——。

03

ぼくはいつもいつも汗を流した
振りかえることもなく歩いた
そしてそれこそが君への愛だった
だからこそひとつひとつを大切に
(『16度目の春』より)

ぼくは彼女の気を引こうと
目立つことをやっていった。
フォークが全盛だったので
教室で大声出して唄ったり、
それまで持ったこともない
ギターに取り組んでみたり、
弾くだけでは物足りなくて
自作曲などを作ってみたり、
作詞の能力を高めるために
詩作の勉強を始めてみたり。

最初は形から入ったのだが
不思議なことに上達が早い。
気をよくして深みにはいる。
すると高い技術が身につく。
そして更なる深みにはいる。
それを繰り返しているうちに
プロになろうという野望が
心の中に芽生えてきたのだ。
そしてそれを実現するため
普通の進路を選ばなかった。

以降いろいろあったものの
結局プロにはならなかった。
だがその頃に始めたことが

ライフワークになっている。

作詞とか作曲とかをぼくは
自分の能力でやっていたと
ちょっと前まで思っていた。
ところがなにかが違うのだ
感性なくして詞は書けない。
基礎なくして曲は出来ない。
勢いがあったのだとしても
感性も基礎もなかった男に
作詞や作曲といったものが
簡単には出来るはずがない。

それが出来たということは
ぼくに何か不可思議な力が
働いたとしか考えられない。
ある時その力こそが彼女の
背中を押す力だとさとした。
もちろん彼女が実際の手で
背中を押したわけではない。
潜在意識層の中にある手で
強く押してくれていたのだ
そうかつて夢で見た通りに。

あれは高校一年、国語の授業の時だった。
何となく後ろを振り向くと、君がぼくを見ていた。
その時からいくつもの歌を、君のために作った。
だけど君にその歌を、聞かせることもなく
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。
（『確かに今でも君はぼくの中にいる』より）

高一の秋、彼女の気持が
なぜか解るようになった。
それがきっかけとなって
自分が彼女が好きである
ことを自覚したのだった。
彼女も何かを感じたのか
何かにつけ接近してくる。
付き合う日も近いと思い
その頃合いを計っていた
そんなある日の事だった。

その頃に知合った友人が
「彼女のことどう思うか」
とぼくに聞いてきたのだ。
瞬間ぼくはびっくりした。
もしかしたらぼくの心が
読まれたのではと思った。
だが彼の「どう思う」は
そんな意味ではなかった。
彼は「どう思う」の後に
「付き合うことになった」
という言葉を加えたのだ。

その言葉を聞いてぼくは
目の前が真っ暗になった。
接近はぼくの思い込みで
またも片想いの巻なのか
と人生に落胆をおぼえた。
だけど彼に自分の心中を
さとられてはならないと
ぼくは平静をよそおった。
そして「よかったね」と
大きく明るい声で言った。

それからしばらくぼくは
面白くない生活を送った。
時間をかけ彼女のことを
好きになっていったから
そうやすやすと気持ちを
切替えることが出来ない。
別の人を好きになろうと
何度か試みてみたけれど、
そんな人いるわけがない。
ぼくにとって彼女以上は
この世にないんだから一。

友人と彼女との付き合いはその後二ヶ月ほどで終わった。別れは彼女から切り出した、と聞いてぼくの心は晴れた。やはりそうだったか彼女は彼を好きではなかったんだ。だけど再び心は暗くなった。別れる際に彼女は「三年間誰とも付き合いません」と彼に約束したと聞いたのだ。

高校時代の三年間は彼女と知り合う運を持っていたが付き合う運を持たなかった。ぼくはもちろん彼女の方も何かを感じとっていながらお互い何をする事もなく熱い気持ちを懸命に押さえ冷やかな時の経過を待った。

ところで彼はなんであの時とくに親しくもないぼくに彼女の事を聞いてきたのか。それがいまもって解らない。もしかしたら友人の目にはふたりが感じている何かが見えていたのかもしれない。そのため断りを入れてきた。そう考えるのが自然だろう。

三年間誰とも付き合わない
その事を聞いてからぼくは
彼女との距離を置いていた。
距離を置いてはいたものの
彼女を好きという気持ちは
日を追って強くなっていく。
その火を鎮めるためぼくは
既に深入りし過ぎてしまい
後戻り出来なくなっていた
創作に精を出したのだった。

別れたのならチャンスだよ。
約束したと言うけどきっと
それは口実で、実はお前の
ことを待っているんだよと
言ってくれる人もいたけど、
そんなことをチャンスとは思えないのがぼくの性分だ。

もしも付き合ったとしたら
それは傷心している彼への
嫌がらせであり結果的には
彼女を彼から奪ったことにな
るのではないかと思うのが
歯痒いけどもぼくの性分だ。
きっと甘い性格なんだろう。

とにもかくにも彼女に毎日
会えることが幸せなんだと
思うことで気を紛らわせた。
そんな日々の向こう側には
卒業という避けて通れない

ひとつの節目が待っていた。

高校三年の冬、帰りのバスを待っていた。
向かいのバス停で君が、バスに乗るのが見えた。
ぼくはバスを目で追った。君の姿を探した。
その時目に映った君は、ぼくを見ていた。
それが君の最後の、さよならだったと思う。
だけど、確かに今でも君はぼくの中にいる。
（『確かに今でも君はぼくの中にいる』より）

卒業の日を前にしたある夕方の事
学校の帰りにバスを待っていると
向い側で彼女がバスに乗っていた。
ぼくは気がつき彼女を目で追った。
すると彼女のほうもぼくに気づき
おたがいの姿が見えなくなるまで
二人は見つめあっていたのだった。
やはり彼女の方もそうだったんだ。

彼女が例の彼と別れてからこちら
ぼくは心のどこかで本当は彼女に
好きな人などいないんじゃないかと
疑っていた。だとすると以前の
彼女とぼくのいい関係は、ただの
思い過ごしということになる、と
思っていたから素直に嬉しかった。

これは告白のチャンスだと思った。
だがぼくは慎重だった。というか
距離を置いたのが裏目に出たのか
えらく慎重でありすぎたのだった。
受験を控えているので仮に行動を
起こしても彼女は受け入れないに

違いないと勝手な思い込みをして
ぼくは何の行動も起こさなかった。

慎重な思いが最も強くなったのが
まさに卒業の時で、最後の最後迄
彼女に近づくことすらしなかった。
そして何の行動も起こさないまま
卒業して、彼女に会えなくなった。
しかし本当に運命の人であるなら
運命の再会があるはずだ。ぼくの
甘さは行動ではなく運命を選んだ。

見たことのある人が
笑いながら通り過ぎていった
振り返ってみても誰もいない
ねえ、これが毎日なんだ
(『ゆき』より)

彼女のことだけを思って朝をむかえ
彼女のことだけを思って夜を過ごす
彼女のことだけを思って歌をうたい
彼女のことだけを思って詩をつくる
卒業から上京まで浪人時代のぼくは
彼女の思い出とか彼女への思いとか
何の行動も起こさなかった後悔とか
好きな人という苦しさと闘っていた。
街で彼女がいないかと探してみたり
時には彼女の幻を見たこともあった。
浪人の境遇なんてどうでもよかった
将来の進路なんてどうでもよかった
彼女のことだけを思って生きていた。

二年後ぼくは新宿の街の中にいた。
とにかく彼女のことを忘れようと
ぼくは東京に救いをもとめたのだ。
だけど慣れない街並がまたしても
ぼくに彼女への思いをつのらせた。
その思いをなんとか処理しないと
上京した意味がなくなってしまう。

上京から数ヶ月後のある日のこと
この思いを客観視出来たら少しは
楽になるかもしれないと思いつき、
日記を書いてみることにしたのだ。
思いが風のように吹いてくるから、
と日記のタイトルを吹く風にした。

その日その時の嘘いつわりのない
気持ちを吹く風に叩きつけていく。
これが大いに役立った。おかげで
ぼくは東京時代を明るい気持ちで
生きていくことが出来たのだった。

東京に出てから数年が経った
彼女のことを忘れようとして
出た東京だったが、結局の所
忘れることなど出来なかった。
とはいえ吹く風の効果もあり
それまではあまりの苦しさに
病気じゃないかとまで思った
気持ちを客観視出来るよう
になったのは大きく、それから
後の生き方や歌や詩の創作に
プラスに作用することになる。
というわけで、ぼくの中での
東京は役目を終えたのだった。

こちらに戻ってから三十数年
何度か彼女に会ってはいるが
やはり日記の効果なのだろう
ぼくは気持ちを乱すことなく
いつも冷静に接しているのだ。
しかし彼女といるとその場の
空気が変わるような気がする。
おそらくは彼女もそのことを
薄ら感じているにちがいない。
恋愛感情は消滅しているので
異性間の空気ではないはずだ。
異次元の空気とでもいうのか
現実を超えている空気なのだ。

あれから何年経ただろう、同窓会に君がいた。
少し髪を伸ばした君が、ぼくを見ていた。
今は遠くの空で、幸せに暮らしているという。
そして今でもぼくは、君の歌をうたう。
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。
だけど、確かに今でも君はぼくの中にいる。
(『確かに今でも君はぼくの中にいる』より)

二十代半ばに行きつけの喫茶店で
ある人から双子霊のことを聞いた。
その人はぼくの生年月日を聞いて
「あなたは十代の頃に、その人に
会っているはずですよ」と言った。
そして「その人を初めて見た時に
懐かしさがこみ上げたと思います」
十代の頃に、初対面で懐かしさを
覚えた女性は彼女しかいないのだ。
これでようやく謎が解けたわけだ。
だがその後その人が言った言葉に
ぼくはショックを受けたのだった。
「だけど現世でその人と結ばれる
ことはありません。お互いにいい
影響を与え合っていくでしょうね」
彼女の結婚を聞いたのはそれから
しばらく経ってからのことだった。

さて今後どうなっていくのだろう。
わかっていることが一つだけある。
背中を押しつ押しされつやりながら
ふたりは生きていくということだ。
それが初対面で懐かしさを感じた

ぼくと彼女の宿命なのだから——。

あとがき

確かに今でも君はぼくの中にいる

あれは高校一年、国語の授業の時だった。
何気なく後ろを振り向くと、君がぼくを見ていた。
その時からいくつもの歌を、君のために作った。
だけど君にその歌を、聞かせることもなく
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

高校二年の秋、ひとりで校庭を歩いていた。
その時君が現れて、ぼくに話しかけた。
ぼくは何と言っていいか、わからずに言葉を伏せた。
あれが運命の分かれ道だったと思う。
それ以来君と話すことに、ためらいを感じてしまった。
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

高校三年の冬、帰りのバスを待っていた。
向かいのバス停で君が、バスに乗るのが見えた。
ぼくはバスを目で追った。君の姿を探した。
その時目に映った君は、ぼくを見ていた。
それが君の最後の、さよならだったと思う。
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

あれから何年経っただろう、同窓会に君がいた。
少し髪を伸ばした君が、ぼくを見ていた。
今は遠くの空で、幸せに暮らしているという。
そして今でもぼくは、君の歌をうたう。
時は過ぎて行った、ドラマなど起こらないままに。
だけど、確かに今でも、君はぼくの中にいる。

奥付

奥付

吹く風

著者：新谷雅先（しんたにまさき）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍，盤珪，高村光太郎，中原中也，ボブ・ディラン，吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本霊異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：[\[https://www.fukukaze.net/\]](https://www.fukukaze.net/)

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

吹く風

著 新谷雅先

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
